
黄巾と共に我は無双する

隙間風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄巾と共に我は無双する

【Zコード】

Z4590Z

【作者名】

隙間風

【あらすじ】

かつて大陸を群雄割拠へと導いた存在。黄巾党。その存在がまだ大陸にばつこしていた時から始まる物語。

この作品は作者の力不足故の駄文によつて構成されています。なお真・恋姫†無双はキャラ設定のみとなります。
「それでもかまわないよ」と言つ方は読んでいただけないとありがたいです。

感想・アドバイス等ありましたら作者の成長のためと思いしていた
だけると嬉しいです。

無力

俺は生きているが死んでいる。

この世に生を受けながらにして世のためになにもしていない。

これが俺の死だ。

大陸では黄巾党っていうのがばつ一にしてるうらしげ無力の俺には
どうすることも出来ない。

「はあ～・・・・・・・・」

そんなこんなで俺は農作をしながら物思いにふけっている。こんな
こと考えても何も変わりやしないなんてことは前から分かって
いる。だけど考えずにはいられない。

その理由としてはひとつ。古くからの学友でもあり良き友でもあつ
た楊奉が黄巾党に入ったという噂を最近耳にしたからだ。

「なんであいつ黄巾党なんかに・・・・・・・・」

俺の中では黄巾党というのはただの殺戮集団または略奪集団という
認識だ。まあ俺が聞くかぎりではその通りなわけだが。

空を見上げると雲行きが怪しくなっていた。

「…………降りそりだな」

俺は急いでほりに向かう。

俺の住んでいる村ではこの村だけの神様信仰があった。ちなみにその神様は主に自然全般を担当しているらしい。だからさしあつて今の時期のように雨が多く降つたり日照りが続くような時にお参りにいくのだ。

そして少し歩いてほこらに着いた俺はよくある参拝姿で丸い石が一つ重ねてあるだけの神様にお願いをする。

雨が止みますよっこ…………。

「一」

なんだ！？ほこらに後光が！？…………。

「ゼーリーは……？」

地に足をつけている感覚がない。なんと表現すればいいんだろう？
そうだな、浮いているとでも言つのだろ？ そんな自分の姿を想像は出来ないが。

「君だね。わたしにお願いをしたのは」

その声の主とともにまわりが明るくなる。しばらく田が慣れなかつたがだいぶ見えてくると目の前には髭が濃く体格もがつちりとした男がいた。

「誰だ？俺にはあなたみたいな知り合いはないんですけど」

「やうだな。わたしはさしづめ君の世で言つ神様という奴だ」

あまりにも胡散臭かつたが俺は冷静に問いをぶつけた。

「神様だつていう根拠は？」

とはいひもののこんな場所にいる時点で疑う余地は俺には考えつかなかつた。が、とても信じられるようなことではないので一応聞いておく。

するとその自称神様は自らの立派な髪を触りながら俺の問いに答えた。

「その答えは君がすでに分かっているはずだ。そんなことより君は自分の無力を嘆いているのだろう?だから私は君に力を与えようと思いつこに君を呼んだのだよ」

「・・・・・・・力?」

「そうとも。私も立場上、下界の今の状況はなにかと厄介でね。なんとかしようと思つていたのだが私が干渉することは出来ないのだよ。だから君に力を与えてなんとかしてもらいたいのだ」

・・・・・つまり俺を利用しようというわけか。

だが俺はこの状況とこの自称神様の言つことに心が惹かれた。初めて生きている心地がした。

「・・・・・具体的には?」

口角をあげ、にやりと笑つた自称神様は言った。

「君には人並み以上の武と・・・・・・。そうだな、人の考え方を読み取る力を与えよう。しかしこの力に至つては人智を超えた力故少しづかち制限をつけさせてもらつがな」

「制限といふと?」

「なに簡単なことだよ。単純に考え方を読み取れるだけで、人の気持ち、心は読み取れない。そういう制限だ。この制限がなければ君も人ならざる神になつてしまふからね」

まさかそのような力を本当に手に入れることができるのか?いやそれは間違いないだろう。直感が俺にそう告げる。

それよりこの力を授かってもいいのだろうか?そんなことが許されるのだろうか?

色々思案した俺であつたが結局答えはひとつしか無かつた。

「その力を俺にくれ」

この返事を分かつていたかのように自称神様は言つ。

「やう言つと思つていたよ。だがひとつだけ我らで誓いをたてなければならぬ」

「?」

「ひとつ、この事は絶対に口外しない。ふたつ、この力はこの世のために役立てる事だ。この誓いを破つたあかつきには・・・・・・覚悟しておけよ。・・・・・・ただしこの誓こそえ守つてされ
くればあとは君の好きなようにしたまえ」

少し沈黙を保ち俺が小さく頷くと辺りがまた暗くなつた。
それと同時に俺にただならぬ頭痛がはしる。

「上へ！」

そのまま俺の意識は薄れていった・・・・・

• • • **40** • • •

なんだ？まだ頭がはつきつしていない。痛みは少しある程度ではいるが。

・・・き・・・る・・・

ん？誰の声だ。

「起きた的時候の母さんは、

「うわー。」

急いで起きるとやうによく知る顔があった。まあ俺の親なわけだが。
どうした?と俺が尋ねると母親はただならぬ様子で俺の肩に両手を置きながら諭すように言った。

「落ち着いて聞くんだよ。あんたは寝てたからさすがなかつただろ
うけど今あたしたちの村は襲われているんだ。このままじゃもうも
たない。悲しいかもしれないけどこの村は捨てて早く逃げるんだよ
」
正直まだ頭がおつつかないためあまり理解できていなかつたがこの
言葉だけは頭に響いた。

村を捨てる。その言葉が俺に重くのしかかつた。今までの俺ならそ
うしただろう。だが今の俺には救いたいといつ気持ちしかない。決
してさつき力を授かったからというわけではない。なぜかは分から
ないがそう思つてしまつたのだ。

「…………」めん

俺は母親の腹部を思つてつさり殴つた。すると声にはならなかつたが
なにか言つたげなまま母さんは倒れていく。

「…………死なないよ…………」

-死なないで-

母さんのそんな考えが俺には分かつた。おそらくこれが神の言う力なのだろう。

これがやつきの出来事を確信へと変える。

その後母親を安全な場所に隠し俺はほこりに背を向け走り出した。

俺が村に戻るとそこは戦場と化していた。

いやこれはもはや戦場とは言えないかも知れない。 略奪、惨殺そんな光景だけが俺の目に映つたからだ。

そしてその標的は俺へと向けられる。

その狂氣じみた声とともに俺へと一人の賊らしき男が走つてくる。よく見るとその男の腕には黄色のひたたれが巻いてあつた。ということはおそらくこの集団は黄巾党で間違いないだろう。

そんな事考えているうちに俺と賊の距離はどんどん縮まっていく。
そして俺の目の前に賊が迫った。

- 殺す -

俺の頭にその一文字が浮かぶ。

今こいつは「お考へていいのだね」。

そして賊は俺に斬りかかってくる。

だが俺は次々とその斬撃を避けていく。

「なぜだ？」

そんな表情を浮かべながらそんなことを呟く賊は焦っているように思える。

神の力による考えを読む力で俺には相手の考えが手に取るようにわかる。これはすなわち敵の動きを読めるのと同義だ。それに加えて今の俺の身体能力。これなら避けるなどたやすかつた。

すると疲れ始めた賊に隙が生まれた。

俺は拳を握り締め賊の顔面を殴りつけた。

「ぐはあっ！」

そのまま殴られた勢いとともに賊は後ろに倒れた。どうやら今の一発で完全に気を失ったようだ。

俺は左手で賊の腰から差してあつた剣を抜き取り右手に持ちかえる。

「いくか・・・・・・・・・・・・」

俺は村の中枢へと走っていった・・・・・・・・・・。

今俺の周囲には確認できるかぎり15人の賊がいる。その15人に俺は囲まれているのだ。

それを次々と斬りつけていく。

俺の体が血で赤く染まつていく。

-殺してやる -

「いつハつ裂きにしねえと気がすまねえ

こいつらの考えが俺の頭に流れ込んでくる。

「…………お前らなぜ何のために生きてこぬ？」

俺は構えをとき静かな怒りを込め賊たちに疑問をぶつけた。

「はあ!? そんなもん決まつてんだろ。金を手に入れ女をばぐらせ

るためだよー!」

ふつ。俺はその答えを鼻で笑つた。

そんな下賤な答え俺は求めたのではない。まあこんな奴らから正しい答えなど見出せるはずなどないと分かつてはいたが。

そして俺は再び剣を構え直し賊の心臓へと剣を貫く。

「二二七」

賊は俺を睨みつけ今にも襲い掛かってきそうな様子だ。にもかかわらず襲い掛かってこないのは俺を警戒してのことだろう。

俺はすぐにでもここに彼らを殺そうとした。

だ
が
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

俺の背中越しにそんな悲鳴が聞こえてきた。

俺は構えたまま後ろを振り向く。

するとさつきまで敵対していた賊たちが次々と見知らぬ集団に斬ら

れていた。その集団は既に装束を身に纏っている。

しばらく傍観していると周りの賊はあらかた地に倒れていった。

すむとその集団からひとつ俺の前に歩み寄ってきた。

「いらっしゃぬ助けと思つたけど一応やういつ性分なんで助けさせてもらつたぞ」

その男は身長は俺より高くすらりとした印象を覚える。肌はけつこう色黒だ。

俺はその男の言葉に偽りがないか一応確かめておく。
そして俺が男に神経を集中させたと同時にこの男の考へが頭に流れ込んでくる。

・・・・・・・・・一応本當のようだな。

びつやから本氣でこいつは俺一人の命を救おうとしたようだ。

「あつがとう」

真意が分かった俺は男にそう告げた。

「こやこや気にしなくてこよ

軽く微笑みながらそうきりかえしてきた男は身を翻しこの場を立ち去りつとした。

「待て！」

だが俺はそいつを引き止める。

その呼びかけに男は振り返つてこちらを見る。

「名を教えてくれ」

少し不思議そうに考えていた男であつたが親指で自分を指をさしながらこいつ言った。

「僕は韓選かんせんだ。白波谷で白波賊をやつしている。賊と言つても略奪とかはやってないけどね」

白波賊・・・・・・・・・・。聞いたことないな。だがどうやらこいつが言うように略奪などは一切やっていないらしい。ちなみにこれもこの韓選の考えを読み取つてのことだ。

俺は頭の中で考えをまとめた。

神に言われたとおり俺は今こそこの力で大陸を救うつもりだ。しかしそれにはまだあまりにも人という名の力が足りない。だがそれがなんとなるかもしない方法が俺は思いついた。

「じゃあ僕はこれで…………」

「俺も連れてつてくれ」

「えつ？」

韓選は驚いた様子で言つた。

「俺も白波賊に入れてくれ。もちろん他意はない」

韓選は額に手をあて考える素振りを見せる。まあ韓選からしてみれば見知らぬ奴がいきなり仲間に入れると言つてるので疑うのも無理はないだろう。

だが俺には分かつていて、「……が俺の武を欲している」と。ならば答えはひとつしかない。

「…………僕たちの首領に聞いてみないと分からぬいけど君の武は魅力的だからね。連れて行くだけは連れて行けるよ」

やはりな。しかし…………すでに分かつていて改めて言われる」とは存外こくなものだ。

俺は韓選に一礼すると母親の存在を思い出しごり言つた。

「母親をまたしてるので少し待つていてもいいのか？」

了承してくれた韓選に再び頭を下げる俺は急いで母親を隠してある所へ向かった。

「母さん・母さん・

「ん・・・・・・

俺が体を揺すりながら呼ぶと母さんは顔を覚ました。

「どうしたんだい？」

俺は慎重に言葉を選んだ。少しでも母さんを悲しませないために。

「俺・・・・・・・の村を出て行く・・・・・・

何かを察してくれたのだろう。母さん俺に一つ聞いてくれた。

「あなたの好きでおし・・・・・・・・

そう言つてはくれたが母さんは目に涙を溜めていた。

そんな母さんを見て俺は一瞬神から授かつたこの力が馬鹿らしくなつた。母さんはなにも言わないでも俺の考えなどお見通しだったからだ。

俺は黙つて背を向ける。

-死なないでね -

「死なないよ。こいつが迎えにいく

俺は小さく呟くと全力で韓選のもとへと走った・・・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4590z/>

黄巾と共に我は無双する

2011年12月16日20時55分発行